

古墳時代社会の諸変革

一人・もの・情報の流れを通してー

富山 直人

●論文の課題

本来、国家形成論は畿内の状況を中心に議論されてきた。その上で、畿内対周辺の対比という中心と周縁の概念による理解の中で議論が進む経緯があった。しかしながら、前方後円墳という対個人を示すモニュメントの存在を認めつつ、集落を対象とした視点から当時の社会や組織を復元することには極めて困難な状況に直面する。システム的な組織の存在を想定することは可能ではあるが、集落研究からはそれを指揮する中心を特定できないのが現状であろう。

また、これまでは、海外の研究成果を援用しつつ、日本の古墳時代が初期国家の概念に該当するかどうかの議論に終始してきたが、近年の動向としては、国家への発展過程は地域によって様々であることが明らかとなっている。

そこで、現時点で日本の古墳時代のどの段階が国家段階に該当するかどうかといった議論ではなく、社会発展過程の諸要素を改めて、検証し提示することが重要と考える。

その諸要素をアジア諸国などと比較可能な状況とすることが、今後の議論を発展させる上で、もっとも重要な作業となろう。

本論では、古墳並びに集落、人・もの・情報の動き、流通経路、渡来人をキーワードとして社会の変化を時期的に区分し、その中で、諸要素の実態を明らかにすることを課題とする。

具体的には

- ①渡来人の動向と流通経路の変化の追求
 - ②畿内と播磨の関係について古墳と集落から検証
 - ③集落から階層性と複合化を検証しつつ社会を復元
 - ④量的な格差から質的な差への変換点を探る
- などの検討をおこなう。

●論文の構成

第1章 古墳時代と基礎社会 一人・もの・情報の流れを通してー

第2章 古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉

第1節 播磨における古墳時代中期の政治変動 ー古墳と渡来人の動向を中心としてー

第2節 播磨における古墳時代の集落 ー渡来人の動向を中心としてー

第3節 摂津・河内の集落と流通経路

第3章 横穴式石室の導入と対外交流

第1節 横穴式石室内部の利用実態とその変化過程

第2節 芝山古墳の検討

1. 芝山古墳

2. 摂津周辺の九州系横穴式石室

3. 九州系石室の分布とその存在意義

第4章 横穴式石室と地域間交流

第1節 前方後円墳への横穴式石室採用動向

第2節 大和周辺地域における実態の確認

第5章 原始から古代へ国家成立への発展段階

第1節 大和における石室分布の実態と時間的变化

第2節 大和周辺地域の動向と画期

第3節 群集墳の動向と父系制社会

第4節 石室の移入の実態とモデル化

第5節 石室伝播からみた社会関係の実態

第6節 社会復元に向けて

第7節 まとめ

第6章 流通から見た国家形成過程 まとめにかえて

●論文要旨

第1章 古墳時代と基礎社会 一人・もの・情報の流れを通して

古墳時代は再分配経済の範疇で理解されることがある。古墳時代の集落からは、防御設備に乏しく、日常的な戦争等の緊張関係は看取されない。古墳から観察される王権の強固な存在感に比べ、集落ではそれがほとんど実態がないかのようである。そこで、当時の社会を想定すべく、幾つかの状況を民族誌も援用し、G. ドゥルーズ以後、再評価が進む、G. タルドの「模倣論」を中心に据えながら、個人に注目して社会の復元を試みた。その場合、軍事的強制権がない社会におけるリーダーは、日々努力が必要で、その地位は、世襲制とはならず、かなり不安定なものとして結論づけた。さらに、食料の獲得、広域ネットワークについても言及した。

第2章 古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉

この章で集落と古墳の研究から、日本の社会の発展過程・中央と周辺地域の社会の実態を論じている。

第1節 播磨における古墳時代中期の政治変動 一古墳と渡来人の動向を中心として

出土した埴輪を分類し編年を行った。さらに、出土遺物や長持形石棺の変化などから、播磨の古墳時代中期を3段階に分類した。その3段階は、王権にとって交通の要衝であった段階（1段階）、独自の渡来系要素の受容が認められる段階（2段階）、王権の中に徐々に再編成される段階

(3段階)として理解した。

これらの段階は、王権における対外交渉のあり方の3段階変化に対応すると理解した。その上で、検証を重ね、前方後円墳から墳形が変化しても、一律に規制として捉えるべきでないことを明らかにした。

第2節 播磨における古墳時代の集落 ―渡来人の動向を中心として―

播磨における渡来人の動向から、5世紀の集落内部での変化を探った。詳しくは、手工業生産における専業制は認められず、集落内部での格差は不明確で、中期前半と後半でも格差の進展は僅かであった。さらに、淡路の状況を検証し、流通経路が再三変化したことが確認できた。その上で、塩生産や玉生産並びに玉祭祀の広がりから、5世紀前半と後半には画期があると断定した。

第3節 摂津・河内の集落と流通経路

集落を分析した結果、各集落は1集団が集団規模の拡大による集住化の促進によって形成されたのではなく、複数の集団が区画された範囲ごとに隣接して居住していると結論づけた。そのため、集団は大きなまとまりへと進まず、分節化した状態で、相互に協業を行うことによって成り立っていた。古墳時代中期における集落内には、古墳に見られるような階層構造は認められず、格差も限定的と云わざるを得ない。

第3章 横穴式石室の導入と対外交流

九州系と大陸系の石室を複数の項目で分析し、分布からその意味を探った。

第1節 横穴式石室内部の利用実態とその変化過程

芝山古墳をはじめとする近畿地方における九州系の横穴式石室の遺物配置から、その傾向を分析し、大和で通有認められる百済系の横穴式石室における遺物配置や木棺の配置との違いを明らかにした上で、時期的変化から、その融合のあり方を明らかにした。

第2節 芝山古墳の検討

1. 芝山古墳

大英博物館所蔵資料を資料化し、資料に基づき、芝山古墳の石室内の出土状況を復元した。

2. 摂津周辺の九州系横穴式石室

播磨から丹波への九州系石室の分布実態を明らかにし、交通の経路を想定した。

3. 九州系石室の分布とその存在意義

従来の流通経路を利用した中央による大陸との直接交渉とそれに伴う物資の独占が九州経由による複数のルートの出現によって崩れた状況を九州系石室の分布から読み取れる可能性を示した。その中心となるのが複数埋葬を導入している今城塚古墳と考え、大陸系石室と九州系石室の分布から、淀川グループと大和川グループに分け、対等な競争関係を想定し、これが、社会発展の出発点と評価できると考えた。

第4章 横穴式石室と地域間交流

横穴式石室を通して6世紀の社会を通観する基礎的作業を行っている。前方後円墳への横穴

式石室の導入、ならびに各地への石室情報の伝播のあり方を検証している。

第1節 前方後円墳への横穴式石室採用動向

最初に前方後円墳へ横穴式石室が導入されるのは、北摂を中心とする地域であり、後に大和へと移り、継続的に築かれるようになる。これにより、両勢力の対立は、大和優位へと移行し、帰着を迎えたと考えられる。前方後円墳築造の時代は、量的な格差の時代であって、そこには、支配、被支配の関係ではなく、個別に共通性を共有する人間関係性の表現、さらにはネットワークに所属している集団の共通性への表明が見て取れる。

第2節 大和周辺地域における実態の確認

大和・河内で中心的な石室形態が周辺地域にどのような影響を与えているかを、基礎的に検証し、それを元に、地域間の情報の流れ、さらには関係性を明らかにした。

第5章 原始から古代へ国家成立への発展段階

横穴式石室の研究から、6世紀の社会について、検討を行った。

第1節 大和における石室分布の実態と時間的变化

独立墳から群集墳への横穴式石室の構築に関する情報の移入のモデルケースを明らかにした。

第2節 大和周辺地域の動向と画期

4章第2節の成果を元に、地域の動向を整理し、中央の状況と周囲への拡散状況から、画期を設定した。

第3節 群集墳の動向と父系制社会

石室の埋葬原理を復元し、2棺埋葬から、多数埋葬への移行時期を探り、人骨の成果などから、大和では、MT85～TK43型式並行期に父系制社会へと移行したと考えた。

第4節 石室の移入の実態とモデル化

摂津までの範囲を中心に対する周縁地域と捉え、播磨などの地域は、その外縁地域として捉えるべき地域とし、石室情報の流れをモデル化した。

第5節 石室伝播からみた社会関係の実態

石室の各地への伝播状況から、TK209型式を画期として、情報の制限の開始を確認し、量的格差からの脱却という大きな社会の変換点を設定した。

第6節 社会復元に向けて

大和においては2系統並立段階から量的な差の段階をへて社会の重層化は進むが、播磨ではそのような動きは取らず、社会の発展は、地域によって異なる

第7節 まとめ

2系統の段階から融合の時期と父系制社会への移行に基づく基礎的社会集団の構成が安定的な段階へと移行する時期を経て、最上位の石室群と、下位の群をもうける動きは、対等な競合から発展して量的な差からの脱却ととれる。6世紀の社会は、在地首長制社会や大和のような前国家段階の社会、また、5世紀後半に直系による父系制社会へと移行した北部九州など様々な社会レベルが混在しており、社会の発展段階には地域差が存在する。

第6章 流通から見た国家形成過程 まとめにかえて

本論に関する研究史を整理し、1章から5章までの成果を改めてまとめた